
『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

ライガ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

【Nコード】

N5250Y

【作者名】

ライガ

【あらすじ】

絶命した楔ちゃんが明久に憑依した……という妄想を詰め込みました。更新不定期。よろしくお願ひします。

「……は？」（前書き）

バカテスト・化学

第一問

以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例：ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点：ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例…』 『オリハルコンとか言う伝説の金属を使えば』 『攻撃力の問題も解決すると』 『僕個人としては思いますけどね』

教師のコメント

二次元と三次元の区別はしっかりしましょう。そして攻撃力が問題ではありません。

「……は？」

人はみんな
自分は死なないと
思っている

いつか命が
尽きることを
頭では理解していても

それは今日や明日じゃ
ないと思っている

ただど死ぬ

今日も死ぬし明日も死ぬ

事件で事故で
病で偶然で

寿命で不注意で
裏切りで信条で
愚かさで賢さで

いつだって
みんな死んでいく

そんな中
女の子のために
死ねる僕は

残念ながら
幸せだ。

人はみんな
自分は殺さないと
思っている

殺人事件が

連日連夜報道されようと

それを

人生とは無関係な

ドラマと同じように

眺めている

だけど殺す

人は人を殺す

何があるかと殺す

恋愛感情で損得勘定で

戦争で平和で

車で食事で

うっかりで甘やかして

漫画の影響で勘違いで

いつだって

人は人を殺してきた

友達のために殺すのなら
少しだけ許される気も
するけれど

それもきつと
勘違いなのだろう。

覚悟は決めた。

か弱き者を守るためなら

この命さえ、惜しまないと。

「……………ところで宗像くん。「先に動いたほうが負ける」って例の言
説、信じる？」

「……………」

「漫画じゃよく見る台詞だけど、現実的にはどうなのかなあ。普通に考えたら先に動いたほうが勝つよねえ」

「だったら試しに先に動いてみたらどうだい？漫画好きの球磨川くん」

切り傷や銃創が目立つ、学園の廊下。二人は覚悟の印に上着を脱ぎ捨て、自分の個性を捨て、余計な武器は捨て、命と名誉さえ捨てる。

球磨川楔。女の子のために命さえ惜しまない、マイナス過負荷の筆頭。

宗像形。友達のために人生さえ惜しまない、アブノーマル異常の悪魔。

彼らを見て、人は何を思うのだろうか。

「えー？先に動いていいのー？あーでも折角のお勧めだけどさすがに気が引けるかな」

饒舌に喋るのは球磨川楔。脱いだ上着の下は廊下の壁にあるように銃創がくつきりと浮かび上がり、瀕死と呼べるほどの血に濡れている。

自分の死期を悟った男である。

「ここは公平にいち、にの、さんで動こうよ」

寡黙に目を細めるのは宗像形。彼の周りには武装していたあらゆる武器が散乱しており、殺人のために身軽さを身につけている。

自分の潔白を汚した男である。

「いいかい？ カウントダウンいくよ？」

いち、「

二人は動かない。真っ向から静かに対峙する二人を見守るように、廊下の傷痕は戦いの行方を眺める。次の瞬間。

「この！」

二人が動いた。

ゴウツ！！という疾風の音が響き、不意打ちを企んで取り出した螺子で放った攻撃は、惜しくも宗像形の額を掠る程度に留まる。

なぜなら、球磨川楔だけに限らず同じく宗像形も動いたからだ。

奇襲の失敗。その代償は己の命。宗像形の繰り出した手刀は球磨川
楔の首を確実に貫き、致命傷を与えた。

「がっ……ふっ！はっ……」

「瞬殺。なるほど、真黒くんの言ってた通りだ。武器をすべて捨て
たほうが軽くなって殺しやすい。そして生まれて初めて人を殺した」

運命が変わることはなかった。

死期を悟った男は死に、潔白を汚した男は後戻りもままならなくな
った。

強い意思を宿していた宗像形の瞳が、急速に崩れ去る。無限の殺意
を持った男に残ったのは、

「けれど、意外とつまらないぞ殺人……」

過去の自分への疑問と、虚無感だった。

「いつ……いやああああっ！！みつ、楔ちゃああんっ！！」

戦いを終えて役目を果たした戦場に、甲高い悲鳴が響き渡る。喜界島もがな。球磨川楔が命を懸けて守り抜いた女の子。

（あーよかった……）

意識が薄れていく中、確かに感じた。

「
」

唇に、自分の守り抜いた 温もりを。

（あは……こりゃ役得だ、なあ）

そこで、糸が途切れるように。

球磨川楔の意識は暗転した。

「……………?」

目が覚める。覚めることができる。まず最初に思ったのは、そんなごくごく平凡なこと。

「あら、目が覚めたのね」

上体を起こして自分の状態を確認　　することはできなかった。
途方もない脱力感が体と意識の両方を襲い、どうしても起き上がる
ことができない。

体中の質感と薬品の香りから、どうやらここは保健室のベッドのよ
うだ。そういえばこの間見たナースもののエロ本は微妙だったな、
とどうでもいいことを考える。

「具合のほうは大丈夫？気分は悪くない？」

自分の顔を覗き込んでくるのは、まるで初対面の相手だった。白衣を着ている辺り、保健医なのだろうが……本当に見たことがない。もう一度よく見よう、あわよくば唇でも奪ってやろうと上体を起こそうと再び試みる。

「ダメよ、起き上がっちゃ。いきなり倒れたんだから、ちゃんと休養は取らないと」

「……は？いきなり倒れた？」

「ええ、振り分け試験だね。残念だけど、Fクラスになっちゃうわね……この学園、そういうことは厳しいみたいだし……」

頭の上に疑問符が浮かび上がると同時に、体中に違和感が訪れる。

まるで……自分の体ではないような感覚が。さながら、身に覚えのない衣服を知らない内に着ていたように。自分の体に……まるで記憶がない。

「とにかく、まだもう少し寝ていてね。」

吉井くん

「……………」

首を動かして状況の把握に取り掛かる。その目が捉えたのは、洗面所の鏡に映る自分の姿。

黒髪ではなく、茶髪。

瞳の色も、黒から茶色へ。

顔の形は、童顔という言葉がよく似合う
が目立つ顔立ち。

ちょっとバカっぽさ

自分の顔ではなく、他人の顔なのは明白。そしてその他人の顔の持ち主が、自分であることも。

「……………あつれええええええつ!?!?」

4月。

校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎えるための桜が咲き誇っている。まさしく満開という言葉がよく似合うような、桃色の花弁を花開かせて、その桜達は新たな門出に立った生徒を歓迎していた。

風にさらわれた桜は紙吹雪を彷彿とさせる。誰もがその光景を見て目を奪われる中、その男子生徒は散った桜しかないであろう地面に顔を向けたまま、いわゆる俯いた状態でブツブツと愚痴をこぼしていた。

「『あーあ意味わかんない』『これまさか安心院さんの仕業？』『まったくやっつてられないや』」

吉井明久。

道が桜の花で覆われる中、一人ならだと歩く。その様子は夢と希望に溢れた新入生のものではない。そもそも、彼が夢や希望などという真つ当な感情など抱く訳もない。

彼は正真正銘

過負荷マイナスという人種なのである。

「『しかもなんだよあれ？』 『家にある食べ物が割り箸だけってどういうこと？』 『驚きのあまり』 『美味しく頂いちゃったよ』」

吉井明久。

彼の名前はそういうことになっているが 正しく言えば少し違う。元々、吉井明久という人間はこんな括弧付けた喋り方はしないし、愚痴を垂らす程何かに悩むような頭のいい人間ではない。どちらかと言えば、百人中百人がバカと答えるような人間なのだ。

そう。彼の本当の名前を、この世界で知る者は誰もいない。

また。彼の本当の名前が、この世界で知られることはない。

そして。彼の本当の名前は

「『まあいいや。』 『真人間を目指す僕にとっちゃ』 『0からのスタートってのもなかなか悪くないぜ』」

球磨川楔。

桜並木の続いていた道の終わり、その学園の前に彼は立ち。

彼の文月学園での第二の人生が、幕を開けた。

「……やりにくいなあ」（前書き）

バカテスト・国語

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（１）得意なことでも失敗してしまうこと』
『（２）悪いことがあった上に更に悪いことが起きるとえ』

姫路瑞希の答え

- （１）弘法も筆の誤り
（２）泣きっ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- （１）弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(1) ツンデレの失敗料理』
- 『(2) 涙目で裸エプロン』

教師のコメント

とりあえず言いたいことは、(1)はともかく(2)は犯罪臭がします。

「……やりにくいなあ」

「吉井。遅刻だぞ」

「『……………』」

校門を抜けた明久を呼び止めたのは、筋骨隆々という言葉をそのまま擬人化したような男のドスの効いた声だった。傍らには空っぽの段ボール箱を持ち、表情からはやれやれ、という感情が伝わってくるような呆れの顔。

彼の名前は西村宗一。補習室の鉄人とも呼ばれる、文月学園の生徒から最も恐れられている存在である。だが、明久はその脇をさつさと通り抜け、まるで無視するような形で生徒玄関を目指した。

それも仕方がないといえば仕方がないことだ。なにせ、彼は^裸この世界で知り合いはいない。知り合いとは、互いに『知り合う』からこそその関係が成り立つのだ。今の彼は、誰のことも知らない、しかし自分のことを知っている人間はいるという一方的な立ち位置にいた。それに、吉井という名前を呼ばれても、それは自分の名前ではない。故に、明久が西村教諭の言葉に気づかなかったのも、自分の名前に呼び慣れていないのも無理はなかった。

「吉井！お前のことだ！」

「『……あ、僕か。』『何か用ですか？』」

「教師を無視するとはどういつつもりだ、まったく」

「『あははすいません』『ちょっとうつかりしてましたー』」

「お前はうつかりで自分の名前を忘れるのか……」

少し不機嫌になった西村教諭の顔が再びやれやれという表情に逆戻りする。ここでぼんやりとしていた、ではなく自分の名前を忘れた、と思われるのが吉井明久という人間だった。千人中千人がバカと豪語する人間なのである。

「まあいい……それより、体調のほうは大丈夫なのか？」

「『体調？』『見ての通り最悪ですが』」

「そうか、元気そうだなによりだ。実は、俺はお前が倒れたと聞いて……『吉井はバカだったんじゃないか？』と思ったんだ」

ひどい言われようだった。

「『あははー何か』 『さりげなく罵倒された気もしますけど、』 『まあそうですね。バカは風邪を引かない』 『とか言いますし。』 『まあバカだから』 『風邪を引くとも言いますけどね』」

「そうだな……。吉井なら、それすらも超越したバカだと思っ
たんだが……。すまない。俺の勘違いだったようだ」

「『ねえアンタ本当に教師？』 『そろそろ聞き流すのも難しくなっ
てきたぜ？』」

今までの吉井という人物に興味が隠せない明久（稗）だった。

「む、話が長くなってしまったな。自分のクラスは知っているだろ
う？急いで行け」

「『ああ、Fクラスでしたっけ』 『了解です』」

話に区切りがつき、明久が校舎へ向かって再び歩き出す。それを見
送る西村教諭は、全身を包む違和感を感じ取っていた。

「……まだ調子が悪いのか？」

彼の名前は球磨川楔。

いずれこの学園を掻き乱すこととなる、世界の異物^{マイナス}である。

「『2・F、2・F……』 あ、ここか 『よし帰ろう』」

自分の下駄箱を見つけるのに一苦労、自分のクラスを見つけるのにまた一苦労して自分のクラスの前に辿り着いた明久。だが、早速帰りたいたいという衝動に駆られた。

それというのも、全ての元凶は目の前にある教室の惨状である。机ではなくちゃぶ台（傷だらけ）。椅子ではなく座布団（綿なし）。床には（腐った）畳。ホームレスご用達の設備だった。

「『これが格差社会ってやつかよ』『うっわどうしょ』『今すぐめだかちゃん呼びたくなってきたぜ』」

「ぐちぐち言っていないで早く座れ！このウジ虫野郎！」

今にも壊れそうな扉を開くと同時、容赦ない罵倒を浴びせられる明久。この世界の人間は罵倒なしで生きられないのかと思う程、若干どころか本気で帰りたくなった明久だが、彼の中で小さな火が灯されたように興味が沸いたことでなんとか踏み止まった。

明久が興味を持ったのは他でもない、この格差社会を如実に再現した学園にだ。きっと他にも楽しい娯楽があると、明久は考えたのだった。

「『いきなりウジ虫呼ばわりなんてひどいよ』『僕、すごく傷ついたんだけど？』『そういう人の悪口はよくない。』『今すぐ謝れ！』『このゴリラ』」

「わかったわかった。早く席に　　って待てや！今言っただろ！『ゴリラ』ってめっちゃくちゃ言っただろ！？」

「『そうだっけ？まあどうでもいいよ』『それより知ってる？』『ゴリラの正式名称ってゴリラ・ゴリラなんだぜ？』『ぶっ………』」

「それ今話す話題じゃねえだろ！？しかも最後笑ったか！？ぜつてえ笑ったよな！？」

明久に第一印象でゴリラと呼ばれた男子生徒が勢いよく憤慨する。彼の名前は坂本雄二。このクラスの代表なのだが、どうやら教壇に立って教室を見回していたようだ。その馴れ馴れしい言動から、どうも吉井明久の知人のようである。

今にも取っ組み合いになりそうな感じで話を続ける二人だが、やがてそれは扉から入ってきた教師によって止められた。

「えー……席に着いてもらえますか？HRを始めますので」

よれよれの背広に生きることに疲れたような顔。どうやらこの最低クラスの担任のようだ。

「『はい』」

「ういーっす」

と、そこで明久はおや？と首を傾げる。さっきまであれだけ険悪だったのに、この男子生徒は大して気にしていない様子だったのが意外だったのだ。この吉井明久とは、恵まれている人間らしい。

「ん？なんだ明久？」

彼の視線に気づいた男子生徒が気軽に声をかけてくる。その様子に、明久は若干眩しそうな表情かおをしながら、

「『……いや、』で、名前なんだっけ？』『うっかり忘れちゃったよ』」

「……お前、やっぱり一回病院に行ったほうが……いや、現代科学じゃ無理か。坂本雄二、だろうが。思い出したか？」

やっぱり、にアクセントを置いた台詞に、明久は男子生徒の名前を小さく繰り返す。やがて視線は雄二に向き、とりあえず名前で呼んでみることにしよう結論づけた。

「『残念ながら思い出せないや』『一年間よろしく、雄二くん』」

「あいよ」

苦笑いをしながらヒラヒラと手を振る雄二。それを見て明久は、

（『……やりにくいなあ』）

ポリポリと頭を掻きながら、居心地悪く近くの座布団に腰を降ろすのだった。

「……やりにくいなあ」(後書き)

誤字脱字、感想、おかしな点などお待ちしています

「……それはどうかな?」（前書き）

バカテスト・英語

第三問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly
y」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「『大地の母、ブックシエル。レギュラー入り!』

教師のコメント

野球ではありません。そしてgrandmotherとは祖母と訳します。

「…………それはどうかな？」

「えー…………このクラスの担任になりました、福原…………」

教壇に立つこのクラスの担任を名乗る人物が黒板のほうを振り返る。だが、そこにあるべきものがなく、一回転するように再びFクラスの生徒のほうへ向き直った。

「……………慎です。何か不備があれば申し出てください」

チョークすら用意されていないことに呆気に取られるクラス一同。そんな中、にこにことした表情を崩さずに元気よく手を上げる生徒がいた。

明久だ。

「『はい先生』『座布団の綿がありません』」

「我慢してください」

「『はい先生』『窓が割れてて寒いでーす』」

「我慢してください」

「『はい先生』『ちやぶ台の脚が折れましたー』」

「我慢してください」

「『はい先生』『自称担任とか言う人がムカつきまーす』」

「我慢してください」

「『あははー』『お前NPCがこのやろっ』」

「では自己紹介をお願いします。じゃあ、窓際の人から」

「『……………』」

あまりのひどい扱いに明久はちよつとどころかかなりブルーになった。イジイジと体操座りでケータイを弄り出す明久だが、とりあえず自己紹介は聞いておくかと窓際のほうに意識を向ける。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞい」

(『ふむふむ、ジジイ口調くんか』 『キャラが強いね』)

「……………土屋康太」

(『ふむふむ、三点リーダーくんか』 『キャラが強いね』)

「須川亮です。みんな……………恋にうつつを抜かす異端者を裁く、異端審問会に加入しないか？」

『『入会を表明しよう』』

「ふ……………友よ」

「『……………』」

「おい明久帰るにはまだ早いぞ」

「『離して雄二くん!』 『僕こんなところでやってける気がしないよ!』」

鞆を抱えての脱走を雄二に止められ嫌々席に戻って再びケータイを弄り出す明久。そういえばさつきから男しかいないじゃないか……
と思考がネガティブになりながらも、そんな明久を置いて自己紹介は続く。

「島田美波です。ドイツからの帰国子女で、日本語の読み書きは苦手です」

やっと女の子だ!!と速効でケータイを放り投げて声のした方向を向く明久。向けた視線の先にはサラサラの髪をポニーテールに括り、整った顔立ち、スラリとした体躯の、いわゆる美少女がいた。

ほわー、と明久が目の保養にしていると、その美少女と目が合う。
『ジロジロ見すぎたかな? まあいいや透視できるまで見ていよう』
と、わりと無茶かつ失礼なことを思っていたところだった。なんと、目が合った美少女が手を振ってくるではないか。

(『おおおおお!』 『すごいぜこれキタンじゃない!?!』 『マジでグッジョブ明久くん!』)

（（（チ……ッ！）））

中学生のように心をときめかせている明久を見てカッターナイフなどの文房具を取り出すクラスメイト。

「予想通り、バカばかりじゃのう……」

「……………これはひどい」

先ほどのキャラの強い二人のなかなか的を射た発言は誰の耳にも入ることはなかった。

「それで、よくウチを乱暴者と誤解してる人がいるみたいけど……
…ウチは男の子に暴力振るったりしません。一年間、よろしくお願
いね」

そう言って締め括り、すんと座布団に座る美少女改め美波。

そんな動作まで可愛らしく映るのだから不思議なものである。

「えー……じゃあ次、吉井くん、お願いします」

と、ついに明久の番がくる。自分の見る限り、周りにいるのは男ばかりで女子はさっきの美少女一人だ。先ほど手を振ってきたこともあり、自分の印象はきつと悪くないはずだ。クラスで唯一の女子というだけあって、明久はぜひともお近づきになりたいと思っていた。

幸い、次の自己紹介は自分の番である。立派な好青年を演じて美少女とお近づきになると、不純な思考の下、明久は立ち上がった。

「『吉井明久です！仲良くしてやってくれると嬉しいかなっ』『それと、タイプの女性はあまり暴力を振らない人です！』」

「……………（ピクッ）」

「『あと、自分で言うのもなんだけど』『僕って結構惚れやすい性格です！』」

「……………（ビキビキ）」

そこでチラッと美波のほうへ振り向くと、あっちも明久のことを見ている。ものすごくいい笑顔だ。どうやらもう一押しだと考えた明久は、その一押しを実行することにした。

「『最後に、実は僕

』『ペタンコが大好きでぎゃああああ

「あああああつー!!」

ドロップキックが飛んできた。

「前言撤回よ！ただし吉井明久は例外っ!!」

「『痛いよ!』』『マウント取ってひたすらグーで殴るのやめて!』

『あと男子の夢を返してえっ!!!』」

『異端審問会の諸君。君達は馬乗りになされている男子を見てなんと
思っっっ』

『『殺さないことがあるっか?いや殺す』』

「予想以上にバカばかりじゃのっ……」

「……………これはひどすぎ」

先ほどのキャラの強い二人のかなりの的を射た発言は誰の耳にも入る
ことはなかった。

クラスメイトが各々文房具という名の凶器を持ち出し、未だ明久は

マウントポジションを取られているというカオスな状況。しかし、意外にもそんな状況はすぐに静まることとなった。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『『『えっ？』』』

ガラツと扉が開く音とその後聞こえてきた女子の声に、その場にいた全員の視線が集中する。その人物を見て、もはやボロボロ状態の明久を除く全てのFクラスの生徒の動きが完全に止まった。

「ちょうどよかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

『あのー……質問いいですか？』

小柄な体をさらに縮こませるように声をあげ、自己紹介をする桜色の髪と新雪のように白い肌が美しい女子生徒。その女子生徒に、文房具を持ったままの男子生徒の一人がおずおずと手を挙げる。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

『なんでここにいますか？』

「『なんでここにいますか？』』 『おいおい随分失礼なことを聞くんだな』 『可憐な女子に対してなんて口の聞き方だよ』 『これだからモテない男は嘘です調子乗りましたごめんなさい』」

首元にカッターナイフを突き付けられて明久は口をつぐんだが、質問をした男子生徒の疑問はもっともなものだった。

それというのも彼女、姫路瑞希はFクラスに留まるような学力の持ち主ではないからだ。彼女はこの学園で入学最初のテストで学年次席に食い込むほどの頭脳を持った才女なのである。

そんな生徒がなぜFクラスに？と疑問に思うのは当然なのだ。

「そ、その……振り分け試験で、高熱を出してしまいました……」

だが、そんな彼らの疑問も、明久含めてすぐに『ああ、なるほど』と頷いた。

振り分け試験で欠席や途中退席すると無得点扱いにされてしまうのだ。明久も実際経験していたため、そのことだけは理解できた。疑

問が取り払われ、今度は数々の言い訳が飛び交う。

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？むしろ熱出たほうができただろ』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『ちはやだっけ？アイマスもいいが、あまり自分を見失うなよ』

『俺は妹が事故に遭って、付きつきりで看病してて』

『どう見ても妄想です。本当にありがとうございます』

「う、ウチも日本語が読めなかっただけで……」

「『いやそれどう考えても致命的』 『すいませんでした』」

「よ、よろしくお願いしますっ！」

瑞希がそう締め括り、怒気の引いたクラスメイト達が自分の席へと引き返していく。美波も馬乗り状態を解き、自分の席に戻った。

そんな動作が今度は荒々しく見えるのだから不思議なものである。

明久も自分の席になんとか戻ると自己紹介が続行された。ぐでつとしたままちゃぶ台に突っ伏していると、明久の耳に先ほどの女子生徒の声が聞こえてきた。

「き、緊張しましたあ〜……」

その声だけで俄然元気になるのがモテない男の性なのだが、そんなことは露知らず、明久は復活した。

「おい姫路、体調のほうはもう大丈夫なのか？」

雄二の野太い声で再び撃沈した。

「は、はいっ。えーっと……」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「は、はい。姫路瑞希です。よろしくお願い
って吉井くん！
？」

だらーっと突っ伏す明久を見つけた端希が驚きの声をあげる。どうやら自分のことを知っている人物のようだ。

「姫路。明久がブサイクですまん」

「『ねえ雄二くんそれフォローのつもり？』 『雄二くんが原因なんじゃないか』 『ごめんね、雄二くんがゴリラで』 『バナナをあげれば何もしてこないから』」

「お前も随分な言い方だなオイ……！」

明久と雄二がメンチを切り合う中、瑞希がオロオロと場をとりなす。

「そ、そうじゃないんです！あの、明久くんは試験中に倒れたと聞いたので、それで……！あの、明久くん、もう大丈夫なんですか？」

「『ああ僕？』 『見ての通り最悪だよ』 『姫路ちゃんこそ無理しないでね』」

「しっかし明久が倒れるとは……天変地異崩壊瓦解の前触れか？」

「『ねえ雄二くん』 『僕が倒れるだけで世界が粉々なの？』 『じゃあ大切に扱ってくれよ坂ウホくん』」

「おんもしれえあだ名ありがとよおバカ久あ……！！」

再びガンのくれ合いを繰り広げる二人にオロオロする瑞希。ひよっ

とすると、実はいい相性なのかもしれない。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせいでパンパンと教卓を叩いて福原教諭が警告をし、

バキィツ バラバラ モワア

教卓がゴミ屑と化した。それと同時にどこに隠れていたのか、埃が
ありえないほどに舞う。

「えー……替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言ってトボトボと教室から出ていく福原教諭。あの人うつ病じ
やないよな、とクラスメイト達は若干心配になった。

「あ、あはは……」

「『はあーあ』もう笑うしかないよこの設備』」

瑞希が苦笑いをし、明久が呆れ返る。それを見た雄二は、誰の耳に入れる訳でもなく、

「……それはどうかな？」

そう、不適に呟いた。

「さて、坂本君。君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

その後、壊れた教卓の替えを持ってきた福原教諭が戻り、HRが再開。とうとう最後の雄二の番になる。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿は先ほどのふざけた態度は見られない。クラスの代表として、なかなかの貫禄があるように思える。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

「『じゃあゴリラね』『はい決定』」

「さて、みんなに一つ聞きたい」

明久の冷やかに全く動じない雄二。そんな雰囲気こそうさせているのか、間の取り方がうまいせいか、クラスメイト全員の視線が雄二へと向けられる。

その様子を確認した雄二は、ゆっくりと誘導するように視線を泳がせ、教室内の各所に移りだした。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れたちゃぶ台。

バカっぽそうな顔面。

腐敗した脳みそ。

「『ねえ雄二くん』『君とはぜひ決着をつけたいなあ』」

「Aクラスは冷蔵庫完備の上、座席はリクライニングシートらしいが」

明久の発言を華麗にスルーし、一呼吸置いて静かに告げた。

「不満はないか？」

『『大ありじゃああああああああ』』
つつ!!!!!!!!!!!!!!

二年Fクラス生徒の魂の叫びが、学園を揺らさせた。

「だろう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

雄二の発言に同調するように次々と不満が爆発する。その反応に満足した雄二は、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべる。野生味満点の八重歯がキラリと光り、

「そうだな。諸君の気持ちは痛いほどわかる。そこで、これは代表としての提案だが」

沸騰した場の空気が雄二の声を響かせるために鎮められる。大声の余韻が残る中、

「 FクラスはAクラスに、『試験召喚戦争』を仕掛けようと思っ」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

クラスの雰囲気はその一言で凍り付く。そんな中、ただ一人動く者がいた。

（『へえ……？』『やっとおもしろい展開になってきたぜ』）

彼の名前は吉井明久。

旧名、球磨川楔。

明久^禊はこれからの展開に期待に胸を膨らませ、誰よりも不敵に表情を歪ませ、嗤うのだった。

「だからこそ」（前書き）

バカテスト・物理

第四問

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には先生はいつも度肝を抜かれます。

吉井明久の答え

『敵』

教師のコメント

あなたに何があったのですか。

須川亮の答え

『俺の嫁、すなわち女神』

教師のコメント

現実を見ない者に女神は振り向かないかと思えます。

「だからこそ」

FクラスのAクラスへの宣戦布告。ピラミッドで例えるなら、底辺が頂点に挑むという構図。

その戦いに勝利を収め、設備を奪う。それは、Fクラスの人間にはあまりにも現実味がなさすぎて、あれほど堂々としていた雄二が夢物語を語る哀れな人間としか映らなくなってしまっていた。

だが、どんな事象であろうと例外は憑き者である。

吉井明久。彼は雄二の言う言葉に強く興味を持った。底辺フクラスによる頂点Aクの打倒。あまりにも滑稽で、かつ迷走していて、さらに荒唐無稽な話。

それは、とてもじゃないが無謀だ。

それは、誰が見ようと蛮勇である。

そんな提案に、なぜ彼はそこまで強い関心を示すのか。その答えは実に簡潔なものだ。

なぜなら。吉井明久を演じる彼は

ただ、分の悪い賭けというものが好きなだけなのだから。

『勝てる訳がない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんさえいればなにもいらぬ』

硬直が解けるなり、今度は非難轟々の嵐が訪れる。Fクラスの学力を鑑みれば当然のことだろう。それでも不敵な笑みを絶やさず、目を閉じてクラスメイトの非難を一身に受ける雄二から目を離し、明久は瑞希に自分の疑問を聞いた。

「『ねえ姫路ちゃん』」「試験召喚戦争」ってなに？」

「あ、はい。えっとですね、要点をまとめると生徒一人につき召喚獣を一匹所持していて、その子達を戦わせるというクラス対抗戦のことです。あ、詳しいことが書いてあるプリントがありますよ」

もしこの質問を瑞希以外の生徒に問うたなら「お前一年間何してた

の「的ニュアンスの言葉がバカという単語付きで返ってきたことだろう。そう考えると、明久の人選もなかなかのものだ。

ぶっちゃけてしまえば、むさ苦しい男より美少女のほうがいいという下心故なのだが。

明久は瑞希から試験召喚戦争についてのルールやその他の詳細が書かれたプリントを受け取ると、礼を言うなり無言で読解に移った。それと同時に組んでいた腕を解き、雄二が教卓に手を突いて目を開ける。

「そんなことはない。俺が勝たせてみせる」

この学園にはFクラスとAクラス合わせて6組のクラスが存在する。それは学力順に振り分けられており、単純計算でも学力差、すなわち戦力差は6倍にもなる計算だ。

そんな絶望的かつ圧倒的な数値を見せられても、雄二が揺らぐことはない。

そんなものは所詮数値であると、そう高らかに宣言する。

『何をバカなことを』

『できる訳がないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

その力強い言葉を耳にしても、やはり否定的な思考は拭い切れない。当然だ。ここまででは、この宣戦布告は迷言以外の何物でもない。

「根拠？根拠なら充分にこのクラスには揃っているさ」

『『『え？』』』』

「今からそれを証明してやろう」

故に、雄二は具体的な今ある戦力を分析する。言葉だけでは頼りないのなら、実際に根拠となることを見せてやればいいのだ。

「おい康太。畳に張り付いて姫路のスカートを覗いてないでこつちにこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

土屋康太。先ほど明久に三点リーダーくんと名付けられた男子生徒が飛び起き、必死に否定のポーズを取る。この構図を明久が見れば便乗するのは間違いなしたが、幸い彼はプリントに釘付けだった。

そんな彼をさておいて、教壇に上がった康太と呼ばれる生徒を雄二が紹介する。

自己紹介では明かされることのなかった、彼の裏の顔を。

「土屋康太。こいつがあムツリーニの有名な寡黙なる性職者だ」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前は、実はあまり一般に知れ渡っていない。しかし今雄二が口にしたムツリーニという名前は、一転して男子からは畏怖と畏敬の念を、女子からは軽蔑の目を向けられている。故に、その事実を聞かされたFクラスは戦慄した。

『バカな……………奴が、あの……………ッ!?!』

『見る……………！くつきりと残った畳の跡を必死に隠そうとしている……………』

……………ッ!?!』

『ああ……………！ムツリーの名に恥じない姿だぜ……………ッ!?!』

早い話がムツリスケベである。三点リーダーを多用するなど、実にノリのいいクラスだった。

「姫路のことはみんなその実力をよく知っているはずだ」

「え？わ、私ですか？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待しているぞ」

姫路瑞希。その学力は先ほど話題になった通り、学年次席というズバ抜けたものを持っている。Fクラスにとって全ての分野において綺羅星のごとく輝く彼女がいれば、相当の戦力になるのは明白だ。

『そつだ！姫路さんがいるんだつた！』

『ああ、彼女ならAクラスにも引けを取らないぞ！』

『さすが姫路さんだ。彼女さえいれば何もいらないな』

見る見る内に上がっていく土気。その光景を雄二は満足そうに見遣り、さらに畳み掛ける。

「それに、木下秀吉だっている」

「んむ？ワシもかの？」

木下秀吉。学力ではあまりその名を耳にすることはないが、他のこととで彼は有名だ。

曰く、演劇部のホープ。
曰く、優等生である木下優子の双子の弟。
曰く、絶世の美少女（謎）。

などなど、変なものも若干混じってこそいるが、噂のタネにされやすい人物であることには変わりない。

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本つて小学生の頃「神童」つて呼ばれてなかったか？』

『じゃあ試験は姫路さんと一緒に体調不良だったってことか？』

『確かになんかやつてくれそうな奴だな！』

坂本雄二。教壇に堂々と演説めいたことをしている今の彼を見て、Fクラス故にバカと呼ぶ者は決していないだろう。その指揮力や統率力、リーダー性には目を見張るものがあり、かつては飛び抜けた学力から『神童』と呼ばれた経験もあるほどの人物なのである。

気がつけば、Fクラスの生徒のいけそうだ、やれそうだ、という積極的な声が教室を震わせるまでに士気が上がっていた

「さらにだ。《観察処分者》の肩書きを持つ、吉井明久だっつい」

「『あーごめん』『今読書中ー』」

にもかかわらず、教室は一瞬にして水を打ったような静寂が訪れた。

「『なるほどね』 大体理解したよ』 要はAクラスを蹴落として設備を奪うってことだよね』」

そんな中、間の抜けた声がやけに耳につく。先ほど名前を挙げられた明久だ。彼はいかにも面倒くさいと表情で語り、立ち上がった。

「『僕はやだなあ』 そんな野蛮なこと、ゴリ本くんだけでやってってくれよ』 戦争なんてバカげたことをなんでわざわざしなくちゃならないのさ？』 『そもそもAクラスだぜ？』 『たとえ今雄二くんが挙げた人の尽力があっても所詮それは「Fクラスの中で」って言葉で片付けられるのさ』 『言いたいことがわかるかい？』 『Aクラスは誰一人欠けることなく成績のいい粒揃いだ』 『そりゃそうだよねえ』 『途中退席するだけで0点扱いにされる厳しいテストの中から勝ち残った人しかいないんだから』 『それに比べて僕達Fクラスはどうだい？』 『例えるならそうだな』 『雄二くん』 『君は手にあるたくさんの水風船と高性能な水鉄砲だけで海の大波に立ち向かうと思うかい？』 『僕は普通、普通じゃないけど思わないよ』 『無理は言わない』 『やめちまえよそんなこと。』」

饒舌。まさにその言葉がピッタリはまるほど、明久の弁論は滑るように口から流れてくる。その後ろ向きな考えから、Fクラスの教室はさっきの震えが嘘のように静まっていた。

誰もが戦意を削がれているにもかかわらず、明久は

「『だからこそ』 Aクラスを負かしてやるっじゃないか。』」

自分の参戦を表明した。

「……………ほう？なぜだ？明久」

ざわめくFクラスに、教壇に立つ雄二とちゃぶ台に登った明久の視線が交錯する。その構図は、まさしく信頼し合う親友そのものだ。

いや、正確に言うならば信頼しているのは雄二のほうだけだ。明久はただ、自分のやりたいことをやるだけ。

それを、雄二は前向きなものと信用しているのだ。

「『決めてるんだ。』 『僕は戦いになったら一番弱い立場の子の味

方をするつて。』 『なんだい？この空気は？』 『なんだい？この設備は？』 『なんだい？この環境はさあ？』 『こんな廃屋じみたところに押し込まれて病気にでもなったらどうするんだい？』 『残念ながら、男としてそんな事態はほつとけないな。』

明久の言葉に、女子二人を除いた男子全員が失った戦意を取り戻していく。そうだ、自分達ならまだ我慢できるが、姫路や島田は病気になるてしまう可能性が充分にある。このクラスの華を失わないためにも、Aクラスを打倒しなければならぬ、と。

不純だろう。戦争の理由が女子のためなど、不純という言葉一つで表すことができる。

だが。

「『不純で何が悪いんだい？』」

明久は、そんなものは関係ないと断言する。そんなもので、自分が止まることはないと言宣する。

「『僕は悪くない。』』 『悪いのは僕達じゃないだろう？』』 『正義悪倫理常識建前哲学有利不利欲望命その他諸々一切関係なく。』』 『た

だ、か弱き者を守るために！」

凜とした表情は、ほんの少しだけどこかの女子生徒会長を彷彿とさせた。だが、それも一瞬のこと。再び不敵な表情に戻した明久は、静かな水面を思わせるような声で、ただ自分の願望を告げた。

「『引つ掻き回してやろうぜ。』この腐った学園を。」

次の瞬間、沈黙していたFクラスが力強い雄叫びをあげた。

何者にも止められない勢いと、信念を乗せて。

「それじゃあ明久。まずはDクラスだ！宣戦布告をしてこい。無事大役を果たせ！」

「『それはやだ』」

「……参ったな」（前書き）

バカテスト・化学

第五問

問 『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『C6H6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学をなめていませんか。

吉井明久のコメント

『簡単すぎるので』『教えて書きませんでしたー』

教師のコメント

もつとなめている生徒がいたとは。では難関大学クラスの問題集を用意しておきますので、あとで職員室に来るように。

「……参ったな」

結局、Dクラスへの宣戦布告は押し切られた明久と自ら志願した美波が二人で行くこととなった。雄二が言うには問題ない、俺を信じろ、騙されたと思うって行ってこい、などの一点張りで、確かに漫画やドラマのように危険な目に遭うとは限らない。だが、それ以前に明久はただ面倒くさがっていた。

「ほら吉井！さっさと歩く！」

「『はーめんどくさい』『ていうか島田ちゃんだけで行けばよかったじゃない』『どうして僕まで巻き込むのさ？』『』」

先ほどの一件が尾を引いているせいか、美波に対して明久が胸を高まらせるようなこともなくなっていた。彼は惚れやすいのと同様、冷めやすい性格らしい。

「だ、だってこういうのってドラマとかでは大抵ひどい目に遭うじゃない。一人だと何かと危険でしょ？」

むしろこの二人だと僕が危険だ、と明久は心の中で小さくぼやく。

もはや明久の美波へのイメージはパワーファイターやキックボクサーなどの職業にクラスアップしたようだ。天は人に二物を与えず、という言葉が不意に頭の片隅をよぎる明久だった。

「『じゃあなんでわざわざ立候補したのさ?』 『僕は一人でも行くつもりだったんだぜ?』 『むしろ一人のがよかったかも』」

「……………だつて」

ぶう、と美波が頬を膨らませる。不満げな表情だ。

「坂本はウチを戦力扱いしなかったんだもん……………なら、他のことで役に立つしかないでしょ?」

「『あーそつか』 『オチ扱いもマスコット扱いもしてくれなかったよねえ』 『まったく雄二くんも人が悪いよ』」

もしも、吉井明久ではなく球磨川禊のほうの人格を知る人物がこの光景を見れば、きっと首を傾げたことだろう。いや、人によれば嫌悪したり歓喜したりと様々であろうが、疑問に思うことはまず間違いない。

事実、この球磨川禊という人物はここまで人に友好的に接したりはしなかった。しかし、それは過去形である。彼が以前に属していた

生徒会では、彼は一人の女の子のために命を惜しまなかった。それは、革命的な変化であろう。

確かに、彼は過負荷マヤナスという人種だ。そんな人物が、自分の中で決めているという理由だけで命を投げ捨てることができるのか。かつての彼では見ることでできなかった、革命的な変化。

人は、それを改心と呼ぶ。

だが、吉井明久の皮を被った球磨川禊がその言葉に当て嵌まるかどうかは定かではない。吉井明久という人格と球磨川禊という人格が入り混じっている、という可能性も0ではないのだ。それは決して改心とは認められない。

故に、彼が改心したかどうかの答えはわからない。まさに謎に包まれている。

「『2・D……』『うん、ここだね』」

だが、彼は考えることをよしとしなかった。

謎であるなら、謎のままでもいい。

自分のいた世界に戻れないなら、別にそれでもいい。

彼の目的は、桜並木を歩いた時と同様、今も変わらない。

『真人間を目指す』

球磨川楔は、もしかすると、とっくに『改心』をしているのかもし
れなかった。

「『じゃあ島田ちゃん頑張ってきてね』 僕も頑張つて応援してる
から」

「ちょ、ちょっと！こつこつというのは男子の仕事でしょ!？」

「『やだなあ島田ちゃん何言ってるのさ』 男子なら僕の目の前に
ぐぶあつ!』 『ちょ、パーで内臓にダメージ与えるのやめてよ!』
『てかそれ掌底つていうんだけど!?!?』」

「吉井がバカなこと言うからでしょ!ウチはれっきとした女子なん
だから!Dクラスに宣戦布告しないと戦争にならないじゃない!」

「『けほっけほっ』 『うーん、でもなあ』 『ほら、絶対襲つて来そ
うじゃない?』」

「ま、まあドラマとかではそうね……じゃあ、宣戦布告してすぐ逃げる……とか？」

「『うーん』『雄二くんは相手の同意を取ってこいって言ったしねえ』『まあいいや』『僕は早くだったらしたいから行くけど』『島田ちゃんはどうする？』」

「う……。い、行く」

「『オッケー了解』『じゃ、女の子に危険が及ばないようにしないとね』『』」

渡り廊下の先、目の前にある一般的な教室のドアを一思いに開ける。ガラスという音が教室の喧騒を掻き消し、Dクラスの生徒の視線が遠慮会釈なく明久達に集中した。雑談などの音響がにわかには静まり、美波はその視線に若干怖じけづいたが、明久はまったく気にした様子はない。

ドアと同様、至って普通の教室にカツカツという足音がリノリウムの床に一人分だけ響く。足音は教壇へと向かっているようで、ゆっくりゆったり音を刻み、それがまたクラスの注目を集めていた。誰だあいつ、などの疑問がひそひそと飛び交うが、それらの声は明久の放つ足音の音量には遠く及ばない。声を出してはいけないような夜の闇が醸し出すような儼かな空気が漂う中、まるで長い時間が過ぎたような感覚で教卓の前に辿り着いた明久は、

「『えー』『モブキャラのみなさんこんにちは』」

Dクラスの心を、ポツキー感覚でさくつとへし折った。

『『ぎゃあああああああああああ つつー！！！！！』』

『』

「『どうしたんですかモブキャラのみなさん！』『最初で最後の出番なのにー！』」

『『『ぐぎゃあああああああああ つつー！！！！！』』

『』

「『所詮やらね役だからなんだっていうんですか！』『せいぜい潔くやられて経験値になってくださいよー！』」

『『『うぎゃあああああああああ つつ！！！！！！！』』』

まさに阿鼻叫喚の地獄絵図。ある者は首を掻きむしり、またある者は体を痙攣させるなど、Dクラスの精神がもはや廃人状態にまで落ち込む。もう死にたいどうせ俺らは脇役だ生まれ変わったら微生物になろう、と生きる気力すらなくした惨憺たる状況のDクラス。

「エグいわね……」

この戦争が終わったら、Dクラスには改めて謝罪をしようと思う美波だった。ともあれ、これで安全に宣戦布告ができそうだ。明久の下へ駆け寄る美波だが、明久の視線が異常なほど一点を凝視していることに気づく。

「吉井、どうしたの？」

「『……参ったな』』どうやら、モブキャラの集団って訳じゃなかったみたいだ』」

同じく教壇に着いた美波が明久の視線を追う。その先には、死屍累々といつた惨状の中で床に突っ伏す生徒がほとんどにもかかわらず、明久の精神攻撃をもとせせずに直立している生徒が 二人。

「お姉様あー！美春に会いに来てくださっただんですねー！」

「み、美春！？あんたDクラスだったの！？」

片方はルパンダイブさながらに美波に抱き着く縦ロールの女子生徒。先ほどの発言で明久はどんなキャラか納得したが、もう一人の生徒がどんなキャラを持っているかは未だ見抜けていなかった。

見た目は地味の王道を極めたような、黒髪に三つ編みの女子生徒だった。だが、その目に宿している光が他のDクラスの連中とは明らかに異なる。爛々と輝かせた目が映しているのは、当然目が合った状態の明久だろう。まるで、彼女の瞳は明久しか映していないような、他のことはまるで興味ないといった感じの目。隣で繰り広げられている美春と美波の攻防を放置したまま、明久は彼女の開いた口に耳を傾け、

「か……可愛い……」

「『逃げよう島田ちゃん』このクラスはマジでやばい」

ドアに駆け出した。

「ちよ、ちよつと吉井!?ま、待ちなさいよ!」

「お姉様!逃がしません!」

「待って!その女の 男の娘!もつとよく顔を見せて!」

「くつそお!」 「そういうキャラかよ濃いにも程があると思うんだけどなあ!」

Dクラスから出てきた二人を追うように、すぐさま教室から先ほどの二人が飛び出す。異色の鬼ごっこが始まった瞬間、明久と美波は全速力で力の限り走り出した。

「……参ったな」（後書き）

誤字が多いなと自分でもつくづく思います。指摘のたびに修正を加えますので、感想と合わせて教えていただけると助かります。

「知るかよそんなこと」(前書き)

バカテスト・英語

第六問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good - better - best
bad - worse - worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good - abnormal - infinity』

教師のコメント

程度を書け、と言った訳ではありません。そしてちゃっかりテンションを上げないでください。

土屋康太の答え

『bad-butter-bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

須川亮の答え

『burst!-burst!-beast!-!』

教師のコメント

『おっぱい』『…したくてうずうずしている』『獣』。まさにあなたのことですね。姫路さんの身が心配でなりません。

「知るかよそんなこと」

10分後。

「『あははー』 『今日の美波ちゃんもかわいーなー!』」

「も、もー、何言ってるのよー、あ、アキー」

仲睦まじい恋人のような雰囲気や言葉を交わす明久達を、Dクラスの二人が絶望した目で見るという状況が出来上がっていた。二人はそれこそ恋人がするように手を握り、ついでに汗も握ってこちらを見つめてくるDクラスの二人の様子を伺っている。いや、美波に至っては顔を赤くして明久の顔もチラチラと伺っているようだった。その姿はまさしく恋する乙女そのものである。

そもそも、一体なぜこんな状況に陥ったのか。

それは10分前に遡る

「『ねえ、島田ちゃん』相談が、あるんだけどっ」

「なに！？何か思いついたの吉井！？」

絶賛校内フルマラソン中の二人。実に春らしく健康にもよさそうだが、後ろから迫る先ほどの女子二人に追いかけていているせいでそんな平和的なものではないのは明らかだろう。もしこの光景をフクリスの誰かに見つかりでもすれば第一級異端者の称号まで与えられてしまう。その先に待つのは天国に住まうおじいちゃんとの再会しかない。

背後に冷たいものが流れる中、必死に明久は走り、なんとかして生き残るために自分の考案した策を伝えた。

「『二手に別れるんだ』そのほうが絶対に安全だよ」

「『二手のほうが安全？なんで！？』」

「だって僕には」 『男子トイレっていう心強い味方がいるからね！』 『じゃ、そういうことで！』 「」

「ま、待ちなさい吉井！あんた自分だけ助かる気！？」

「大丈夫さ島田ちゃん！」 『僕は君の屍を越えていく！』 「」

「それ普通逆よね！？俺の屍を越えていけ！」 『じゃないの！？』 「」

「あつはつはー！」 『ドラマの見すぎだぜ島田ちゃん！』 『少年ジャンプじゃあるまいし』 『リアルでそんな台詞期待するもんじゃないぜー！』 「」

「こ、このゲス野郎！」

「あははははー！」 『最高の褒め言葉ありがとうー！』 『恨むならドラマじゃなくてジャンプを見なかった自分を、』 「」

『お姉様と肩を揃えて走るなんて……！許せません！待ちなさいそのブタ野郎！』

『と、トイレ!? う、うん! 私、そういうの初めてだけど、頑張るね! 一生懸命頑張るから!』

「二手に別れるのね? じゃっ、幸運を祈るわ吉井」

「『待つてえー!』 『お願い一人にしないでえー!』 『あの人が絶対やばいよ!』 『肉体的にも精神的にも殺されちゃう!』」

縦ロールの女子は美波を、三つ編みの女子は自分をと考えていた明久だったが、いつの間にか縦ロールの女子の標的が変更されていたらしい。三つ編みの女子はトイレまで追いかけてくる気で、何を頑張るのか明久は戦慄しっぱなしだった。とりあえず男の尊厳が打ち砕かれるのは確実だろう。囿にこそされかけたものの、さすがに不憫に思えた美波はほぼ半泣きの明久の隣についていていた。

「で、どうするのよ吉井。もう策はないの?」

「『えーっと』 『あ、このまま逃げ続けるとか』」

「どこまでも追いかけてくるわよ? 美春は。経験済み」

「『うぐっ』 『あ、どこかに隠れよう!』」

「匂いで追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『ぬぐぐ』あ、Fクラスに戻ればいいんじゃない！？」

「ところ構わず追いかけてくるわよ？美春は。経験済み」

「『君ら二人ツツコミどころが多すぎるぜ！？』」

誰よりも苦勞している美波だった。

「……ね、ねえ吉井。ウチに任せてみない？」

「『え？』島田ちゃんに？」

「ちよ、ちよつと提案があるんだけど！……乗ってみる？」

提案があるだけでなんでそんなにどもるんだろう、と思った明久だが、自分の考えた策は先ほど無惨に散ったばかりだ。他に思いつく考えもなし、それに、走り始めて10分が経過しようとしているにもかかわらず、後ろの二人は息切れすら 否、息切れはしているようだ。だが、明久にはそれが疲労からではなく興奮から息切れ

しているように思えてならなかった。もはやトラウマ級の恐怖である。

美波の提案に、さすがに体力の限界が近づいてきた明久は頷いて肯定の意を示す。後ろの二人に聞こえないよう耳打ちしてきた美波の口から出た提案は、まさしく賭けと呼ぶべきものだった。

「『……マジで?』」

「そ、それしかないでしょ!? 嫌なら別に」

「『いや、やろう』』そろそろ体力の限界だしね』」

「『……じゃ、じゃあ。予定、通りに』」

こくりと頷く明久。その直後、明久と美波は立ち止まり、後ろを向いて声を張り上げた。

「『その二人、止まれ!』」

「ブタ野郎風情が美春に命令しないでください!」

「ねえその男の娘！何て言うお名前なの！？」

「『止まってよ！』『せっかくクライマックスっぽく言ったのに！』
『もうやだ君ら！』」

「二人とも、止まりなさいっ！」

美波の言葉でようやくブレーキをかけるDクラス二人。その隙に、すかさず美波は声を重ねる。

「二人とも、ウチらを追いかけるのはもうやめて。美春も、そのあなたも」

「どうしてわかってくれないのですお姉様！美春はこんなにもお姉様を愛しておりますのに！」

「やだもん！その娘は私がお持ち帰りして蠟人形にして一生の宝物にするんだから！」

「『怖っ！！』『それ殺人だよ！』『僕の人権どこ行ったのさ！？』」

「吉井……じゃ、なくて……。あ、アキ！少し静かにしてて」

美波のその言葉に、Dクラスの二人の動きがピタリと止まる。自分の耳にしたことが信じられないのか、胡乱な目が眼前の男子生徒と女子生徒の間をさまよう。

その様子を見た美波は、意を決したように明久の手を握り、

「だ、だってウチとアキは……、っ、付き合ってるんだから！」

爆弾を、投下した。

そして、今に至る。

予想通り、効果はてき面。Dクラスの二人は世界の終わりを目の前で見たような表情で明久と美波の睦まじい姿を凝視している。どうやら美波の『恋人のフリ』作戦は成功したようだ。

とはいうものの、さすがにこうして手を繋ぐ様をジロジロ見られるのは好きではない。というか、恥ずかしい。さっさとこの場から逃げようと、美波は最後に締め括る。

「じゃ、じゃあそういうことだから！もう追いかけて来ないでね」

「ま、待ってくださいお姉様！なら、美春とのあの夜は遊びだったんですか！？」

「変な言い方しないでよ！？別に何もしてないでしょ！？」

「いいえ！お姉様はいつも美春がベッドに横になると甘い言葉をかけてくれました！それも毎日！」

「妄想！それ妄想だから！夢と現実の区別くらいはつきりしてよ！？」

「そつだよそこの男の娘！私のこの気持ちはどこにぶつけられたいの！？」

「『知るかよそんなこと』 『その壁にでもぶつけられたい？』」

「そつじゃないと私……！あなたを殺して蠟人形にするっ！」

「『だから怖いよ！』 『しかもあなたを殺して、の後って「私も死ぬ！」じゃないの！？』 『ちゃっかりやりたいことやっちゃってるよ！』」

「とにかく！二人とも、もう追いかけるのはやめて！行く、あ、アキ」

その言葉で、今度は硬直を通り超して石化状態で立ち尽くすDクラス二人を置いて歩き出す。後ろから追いかけてくるような足音も呼び止める声もなかったが、未だ手を繋いだままの二人は盛大にため息を吐き、自分のクラスへ足取り重く引き返していくのだった。

「で、宣戦布告はしてきたのか？」

「……あ」

「『その前に一発殴らせる』」

結局、Dクラスへの宣戦布告は明久にジジイ口調くんと命名された秀吉が行き、屍状態継続中のDクラス代表からあっさりと同意を得たのだった。

「……それより二人とも、なんだか仲良くなってませんか？」

「『え？』 『むしろ悪くなった気しかしないよ』 『でしょ？美波ちゃん』」

「え、あ、そ、そうね、アキ」

「……ふんふん」

「知るかよそんなこと」(後書き)

総合評価が1000point! 感極まる、とはこのことでしょうか。
これからもよろしくお願いします!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5250y/>

『楔ちゃんが吉井明久に憑依したようです。』

2011年11月22日01時11分発行